

## 引用文献

- Hubbard, C. E. 1936 *Apochiton burtii* C. E. Hubbard, Hook. Ic. Plant. **34**. Tab. 3319. Ohwi, J. 1941 An Account of the tribe Eragrostaceae of Japan, II. Bot. Mag. Tokyo **55**: 309-313. Pilger, R. 1954 Das System der Gramineae. Bot. Jb. **76**: 281-384. Potzta, E. 1952 Über die Blatt Anatomie der Isachneae. Ibid. **75**: 321-332. Prat, H. 1936 La Systematique des Graminées. Ann. Sci. Nat. Bot., 10<sup>e</sup> série, **18**: 165-258. Tateoka, T. Karyotaxonomy in Poaceae III. Further studies of somatic chromosomes. Cytologia in press. ———— スズメガヤ亜科・キビ亜科の葉の解剖学的特徴の再検討, 植研雑, 印刷中。

### ○ ハコネグミの毛について (檜山庫三) Kōzō HIYAMA: On the scaly hairs of *Elaeagnus Matsunoana* Makino

グミ類の識別には毛の性質が一つのよいきめたとされているが、ハコネグミも特徴のある毛を持つている点で著しい。この葉裏のグミには3種類の毛が見られ、その中で一番目だつのは鱗状毛(勲章のような形をした星状鱗毛)で、これが初めは全面に密布(果時にはややまばらになるが)するものが多い。次に目につくのは15-20 岐した星状毛で、中脈上を除けば点々とまばらに生えている。この星状毛は葉の表面のものに比べるとやや太めで分岐の数も多い(表面の星状毛は5-10 岐する)。グミ類の星状毛は、本来、鱗状毛となつて排列されるべき分裂細胞の配置が、毛軸の伸長によつて乱された結果の形成と思えるもので、その形は分枝毛の軸の短縮したものと変わらず、正しい放射状をなしているとは云えない。以上の星状毛や鱗状毛はグミ類の毛としては普通に知られているものであるが、ハコネグミの葉裏には更にもう1種類の毛がある。それは鱗状毛の上に更に星状毛がつぎたされた形となつた複雑なものであつて、以下これを鱗星毛と呼ぶことにする。ハコネグミの鱗星毛の量は一般に鱗状毛よりは少いが、時にはその逆のこともあり、星状毛とはほぼ等量か、時にはそれよりも多い。鱗星毛の量は同じ木でも葉によつてまた異なると云える。ハコネグミの原採地である相州箱根山にも単なる鱗状毛より多量の鱗星毛を布く葉を持つたものがある。この鱗星毛はただちらりと見た位では普通の星状毛や鱗状毛と見誤られることもある。駿州愛鷹山や天子ヶ岳辺の山地には、大部分の葉に鱗星毛の多いハコネグミがあるが、最近荒木英一氏が報告されたウラボシハコネグミ(北陸の植物 5 巻 43 頁)がやはりこの物と同じであつて、荒木氏が星状毛と思われたものは実は鱗星毛に他ならない。この事実は、私の手元にあるウラボシハコネグミの「アイソタイプ」に相当すると考えられる標本(駿州天子岳, 1951 年 6 月 25 日, 古瀬義氏採, n. 18641)によつて確めることができた。この標本によると星状毛はごく少量しか見あたらぬ。度の強いルーペで鱗星毛の上のところをのぞくとたしかに星状毛化した部分だけが見える。

なお、ウラボシハコネグミは花果のない標本ではカツラギグミと区別が難しいと云われているが、しかし、カツラギグミの葉裏には鱗星毛がないから、この点に注意すれば、両者は葉だけで簡単に識別することができる。